

Global Press

無料

終わらない戦後～オーストラリアに眠る日本人捕虜ら 522人の遺骨～

南田登喜子

オーストラリアは、日本人にとっては平和であっけらかんとした明るいイメージばかりが浮かぶ。親日的でフレンドリー、日本語教育も盛んだ。しかし、こちらでは「日本はオーストラリアの本土を攻撃した唯一の国」という事実はしっかりと語り継がれている。



カウラの日本人戦没者墓地。毎春開催される桜祭りの最終日には、鎮魂の祈りと平和への願いを込めて、慰霊祭が執り行われる

今年9月、兵庫県に住む87歳のIさんが、息子とともに戻るオーストラリア南東部にある小さな町カウラまで墓参りに来た。「ニューギニアで戦死」とされていた兄の墓がカウラにあるという情報が遺族会を通じてもたらされ、いてもたってもいられなくなったのだという。ニューギニア訪問で区切りをつけたつもりだったIさんにとって、戦後65年たった届いた報せは、まさに青天のへきれきだったに違いない。

渡豪を相談された息子にとってもそれは同じで、当初、実現は難しいんじゃないかと考えていたらしい。そもそも、ダイビングで有名なグレード・バリア・リーフや大陸中央にあるエアーズ・ロック、シドニーのオペラ・ハウスなどには関心を持っておいたが、カウラに関する知識はまるでなかった。

シドニーの西約300キロに位置するカウラは、第2次世界大戦中に日本人捕虜による集団脱走事件のあった町として知られ、オーストラリアでは歴史の教科書にも載っている。

カウラ第12戦争捕虜収容所で事件が起こったのは、1944年8月5日未明のこと。前日の「下士官と兵を分離して別の収容所に移送する」という通達が引き金となって、捕虜として生きながらえるよりも「名誉の死」を求める声が高まり、突撃ラッパを合図にして、現代軍事史上最大規模と言われる大脱走事件が決行されたのだ。収容されていた日本人捕虜1,104人のうち、最終的に234人が亡くなり、オーストラリア側にも4人の犠牲者が出た。捕虜の大半は偽名を使っていたと言われ、多くが偽名のまま埋葬された。

終戦後、退役軍人会カウラ支部のメンバーは、同郷のオーストラリア人墓地だけでなく、日本人墓地も手入れするようになった。激しい反日感情が吹き荒れていた頃の話である。

その後、1964年に在豪日本人戦没者墓地が整備され、アンザック局(現オーストラリア戦没者墓地局)が信託地として管理するようになった。その際、もともとカウラにあった247柱に加え、かつて収容所があった南オーストラリア州バーメラ(146柱)やビクトリア州タツラ(45柱)、ニュー・サウス・ウェールズ州ヘイ(37柱)をはじめとするオーストラリア各地の墓地から、戦時中に死亡したすべての日本人の軍人・軍属、及び民間人抑留者の遺骨計275柱がカウラの墓地へ改葬された。

オーストラリア公文書館には、Iさんの兄が1943年1月にニューギニアの激戦地で捕われて

から、同年3月にニュー・サウス・ウェールズ州ゴールバーンの病院で亡くなるまでの記録が、実名で保存されていた。同地の墓地からは全部で10柱がカウラへ移されたとみられるが、ほかのご遺族は果たしてオーストラリアにお墓があることを知っているのだろうか？

カウラの日本人戦没者墓地にずらりと並ぶ墓標には、それぞれ名前と死亡年月日、没年齢が刻まれている。兄の墓標を見つけたIさんは、日本から持参した戒名の書かれた小さな木片を傍に置いて生花を献花し、線香をあげ、果物とおにぎりを供えて読経した。

三人兄弟の末っ子だったIさんは、「これで、次兄のことを気にかけていた長兄の墓前に、胸を張って『ちゃんとやってきたよ』と報告できる」とほっとした表情を見せた。戦争を生き延びた兄弟は、もう一人の兄弟が亡くなったことを事実として受けとめ、日々の現実的な暮らしを積み重ねてきたものの、一片の戦死公報だけが戻ってきたことへのわだかまりは消えることがなかった。

いずれ遺骨を日本へ持ち帰りたいと考えたIさんは、墓参に立ち会った日本文化センター会長のドン・キブラーさんにその可能性を聞いてみた。「ほかの墓地から移されてきた遺骨は、それぞれの墓碑の下に埋葬されましたから、できなくはありません。でも、この墓地が整備された時、遺骨帰還は将来的にも行わないと双方が合意したのですよ」という答えが返ってきた。

戦時中、日本政府は日本人捕虜の存在自体を認めず、カウラ事件も極秘に扱った。キブラーさんは、戦後になってから遺骨帰還の提案がなされた時も、「カウラに日本人はいなかった」と当時の厚生省が回答した、と記憶している。

『鉄条網に掛かる毛布—カウラ捕虜収容所脱走事件とその後—』(スティーブ・ブラード著・田村恵子訳／オーストラリア戦争記念館出版／2006年)には、こんな記述もある。

しかし厚生省の職員は、カウラの墓地の存在を知っていた。

1954年には、カウラの元捕虜83名の実名を確認し、遺族に

連絡を取り始めた。遺族の多くが戦死公報の通知どおりに、

「ニューギニアで死んでくれていたほうが良かった」という

反応を示したため、その後厚生省は身元確認を中止した。

そういう時代だったんだろう……と思うしかない。その頃の日本の社会は、捕虜の存在自体を受け入れることができず、「なかったこと」にしようとしたのだ。

今はもう違うだろうか？

捕虜体験を持つ元日本兵の多くが、そのことを家族にも言えないまま亡くなっていくのはどうしてなのだろうか？

厚生労働省には、生年月日や住所、近親者名などの情報が記され、直筆の署名が入った「俘虜(ふりよ)名票」が保管されている。ただし、戦没者遺族からの働きかけに応じて調査されるもので、積極的な調査は行われていないという。

戦争を知らない世代のわたしは思うのだ。無意味な烙印を押されて傷ついた元捕虜の方々の名誉と尊厳はいつになったら回復されるのだろうか、と。うやむやなまま、時が過ぎゆく中で、戦後が終わったようなつもりでいていいわけがない。

肉親の終焉の地を探し続ける遺族がいる一方で、今もまだ多くの日本人が人知れずカウラで眠っている。

Iさんは厚生労働省に手紙を出してみるつもりだ。

筆者



南田登喜子(みなみだ・ときこ) フリーランスライター、オーストラリア

フリーランスライター。オーストラリアを皮切りに、各地で言葉を学び、旅と仕事を交互に繰り返しつつ、7年をかけて五大陸70カ国余りを放浪。世界中にステキな場所がたくさんあることを実感したものの「やっぱりオーストラリア！」と振り出しに戻る。現在はシドニー及びポートステーションを拠点に活動。

南田登喜子の新着記事

ウラン資源大国オーストラリアの非原発 2011年06月07日

国境を越えた子の連れ去り～オーストラリアの離婚事情と日本のハーグ条約批准問題を考える
～ 2011年02月21日

[もっと見る](#)